【神学部】中期計画総括シート

提出日： 2023 年 1 月 23 日

責任者	神学部長	担当部局	神学部

1　神学部の理念、目的、各種方針

神学部の理念	変更の有無
神学部は、「キリスト教の伝道に従事すべく選ばれた者を鍛錬する」（関西学院創立時制定の「憲法」第二款「目的」）ことを理念とする。	有・無
神学部の目的	**変更の有無**
神学部は、「キリスト教の伝道に従事すべく選ばれた者を鍛錬する」ことを理念とし、神学研究の発展に努め、伝道者の育成ならびに広くキリスト教の思想および文化の理解を求めて、キリスト教神学の基礎と専門領域双方において教育を行う。	有・無
学位授与方針（DP）	**変更の有無**
Kwansei コンピテンシーの獲得を念頭において神学部のディプロマ・ポリシー（DP）を以下のとおり定める。 1. 神学を学ぶための基礎力を修得している 2. 大学生に相応しい基礎力を修得している 3. 旧約・新約聖書、キリスト教の歴史、教理、実践の基本的知識を修得している 4. キリスト教文化、諸宗教について基本的知識を修得している 5. 大学生に相応しいコミュニケーションができる 6. 伝道者コースの学生はキリスト教伝道者としての知識を修得している 7. 伝道者コースの学生はキリスト教伝道者に相応しい技能をもっている 8. 伝道者コースの学生はキリスト教伝道者に相応しい関心をもっている 9. 旧約・新約聖書、キリスト教の歴史、教理、実践、思想・文化、諸宗教のいずれかについて発展的知識を修得している 10. キリスト教神学についてのレポートあるいは論文を執筆することができる 11. キリスト教を広く様々な問題のなかで捉える関心、問題意識をもっている 12. 神学の領域を超えて汎用的な知識、技能、関心をもっている 13. 現代社会の中でキリスト教に関して専門的知識を基に必要な技能を用いて積極的に考えることができる	有・無
教育課程の編成・実施方針（CP）	**変更の有無**
大学生に相応した基礎力の修得（キリスト教教育科目群／言語教育科目群／基礎教育科目群） ＊神学部で学ぶための基礎知識を修得している ＊キリスト教、人権問題、メソジストの伝統と神学部について基本的な知識を修得している ＊英語の基礎力を修得している ＊独語の基礎力を修得している ＊ワープロ、表計算、提案用PCソフトを用いることができる ＊レポート・論文を書くための基礎力を修得している ＊プレゼンテーションをすることができる ＊文献講読の基礎力を修得している **キリスト教神学を学ぶための基礎的知識、技能、関心の修得（専門基礎科目群）** ＊旧約聖書について基本的知識を修得している ＊新約聖書について基本的知識を修得している ＊キリスト教の歴史について基本的知識を修得している ＊キリスト教の教理について基本的知識を修得している ＊キリスト教の礼拝、祈祷、教育、福祉等の実践について基本的知識を修得している ＊宗教一般について基本的知識を修得している ＊キリスト教芸術について基本的知識を修得している ＊キリスト教思想について基本的知識を修得している ＊キリスト教の古典語について基本的知識を修得している ＊英語あるいは独語で専門的な文献を読解できる ＊ディスカッションを通したコミュニケーションができる ＊英語による基本的なコミュニケーションができる **キリスト教伝道者としての基礎力の修得（キリスト教伝道者コース）** ＊キリスト教の礼拝、祈祷、教育、福祉等の実践について発展的知識を修得している ＊世界や社会におけるキリスト教の状況、有り様についての知識を修得している ＊新約聖書を読むためのギリシャ語の基礎知識を修得している ＊キリスト教またはその精神を実践する専門職につくための基本的技能を身につけている ＊現代社会におけるキリスト教宣教について問題意識をもつ ＊キリスト教の福音に基づいて生の意味や規範等を広く他者に伝えようという関心をもつ ＊宗教的教養を身につけ、対話能力をもつ **キリスト教神学に関する発展的知識、技能、関心の修得（専門専攻科目群）** ＊旧約聖書について発展的な知識を修得している ＊新約聖書について発展的な知識を修得している ＊キリスト教の歴史について発展的な知識を修得している ＊キリスト教の教理について発展的な知識を修得している ＊キリスト教芸術について発展的な知識を修得している ＊宗教一般について発展的な知識を修得している ＊キリスト教の思想や文化について発展的な知識を修得している ＊キリスト教神学について発展的な知識を得る方法を用いて分析・考察を行うことができる ＊神学研究の成果を、レポート、論文として執筆することができる	有・無

＊キリスト教神学を専門的に研究するための知識・技能を修得している
＊人間相互の個性・多様性、文化の国際性を尊重し、良好な人間関係を形成することに関心をもつ
＊人権問題、環境問題、生命倫理、福祉等の国際的・現代的な問題について関心をもつ

"Mastery for Service"を実践するための基礎的・発展的知識、技能の修得
＊キリスト教の福祉（ディアコニア）について基本的な知識と技能を修得している
＊キリスト教の福祉（ディアコニア）について発展的な知識と技能を修得している

神学の領域を超えて汎用的な知識、技能、関心の修得（自由履修科目群）
＊専門的な学問領域の枠を超えた広汎な教養および柔軟な思考方法・思考力を身につける

学生の受け入れ方針（AP）	変更の有無

【関西学院大学（学士課程）】

Ⅰ．関西学院大学アドミッション・ポリシー
世界を視野におさめ、他者（ひと）への思いやりと社会変革への気概を持ち、高い識見と倫理観を備えて自己を確立し、自らの大きな志を持って行動力を発揮する"Mastery for Service（奉仕のための練達）"を体現する世界市民を育成することが関西学院のミッションです。
関西学院大学は、このミッションに共感し、大学での学びや諸活動の中で、自分への挑戦をし続ける意欲にあふれ、さまざまな適性を有する多様な背景をもった学生・生徒を世界のあらゆる地域から受け入れます。
そのために、これまでに培われた確かな基礎学力、活動や経験を通じて身に付けた資質、能力、学ぶ意欲や人間性などを、多様な入試制度により多元的に評価することを基本的な方針としています。

Ⅱ．各学部のアドミッション・ポリシー
神学部アドミッション・ポリシー
神学部では、キリスト教が人類の歴史の中で生み出してきた思想や文化的財などについて専門領域ならびに学際的領域での学びを深め、その精神に基づいて社会に奉仕することができるよう、教育することを目標としています。
くわえて高等学校までの基礎的な学習を土台にして、ボランティアや課外活動、あるいは社会人としての経験などから培った多様な能力をもつ者を幅広く受け入れています。
そのため、以下の項目を募集方針の要素として、筆記を中心とする一般選抜入学試験と、面接（口頭試問含む）を採り入れた各種入学試験によって高等学校における基礎学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を、それぞれの入学試験において重み付けを行い評価しています。

神学部に入学を望む者に期待することは、
1. キリスト教の生み出した思想、文化的財などの学際的な領域に興味をもっている
2. キリスト教について幅広く関心をもっている
3. 世界の歴史や日本の歴史について知識がある
4. 日本語、英語について一定水準の能力がある
5. 「倫理」あるいは「数学」あるいは「地理」について知識がある

キリスト教伝道者コースに入学を許可される者は、
6. 将来クリスチャンワーカーを含めた伝道者となる意志をもっている
7. バプテスマ（洗礼）を受けた者である
8. 聖書、キリスト教について一定量の知識がある
9. 聖書、キリスト教について調べることができる

Ⅲ．入学試験ごとのアドミッション・ポリシー
1．一般選抜入学試験
一般選抜入学試験は、各学部での教育に必要な「総合的な学力を持つ受験生を選抜する」ものです。
一般入学試験では各学部の教育理念・目標に基づき試験教科・科目、配点を設定し、筆記試験により関西学院大学で学ぶために必要な学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定するための問題を独自に作成しています。
全学部日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語」「国語」を必須とし、「日本史」「世界史」「地理」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。全学部日程の国際学部については、高い英語能力を有する生徒を評価するため、「英語」に特化した「英語」「英語論述」による入学試験も実施しています。
学部個別日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語（記述式含む）」「国語（記述式含む）」を必須とし、「日本史」「世界史」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。なお文学部・法学部では「日本史」「世界史」「数学(記述式)」に加えて「地理」を選択科目に加えています。人間福祉学部については学部個別日程において「英語（記述式含む）」「国語（記述式含む）」の 2 科目による筆記試験を行っています。教育学部については初等教育学コースの主体性評価方式の入試において、高等学校における生徒会活動、学校行事、課外活動等でのリーダーシップを、調査書と提出書類を合わせて評価する入学試験を実施します。
理系入学試験においては全学部日程を 2 日間実施、入試制度も 2 種類実施しています。総合型および数学・理科重視型においては、本学で学ぶために必要な「英語」「数学(記述式)」を必須とし、理科(記述式)「物理」「化学」「生物」のいずれかを選択する筆記試験を実施しています。
一般入学試験共通テスト併用／英数日程は、英語・数学型、共通テスト併用型・英語、共通テスト併用型・数学の3方式を実施しています。英語・数学型は、関西学院大学の「英語（記述式含む）」と「数学(記述式)」による筆記試験を実施し、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定しています。共通テスト併用型・英語、共通テスト併用型・数学は、関西学院大学の「英語（記述式含む）」または「数学（記述式）」に、大学入学共通テストの教科・科目の得点を加味し、各学部で学ぶための学力と総合的な基礎学力を有する生徒を選抜するために実施しています。

大学入学共通テストを利用する入学試験は、「一般入試とは異なるタイプの受験生を受け入れるための入試制度」と位置づけています。大学入学共通テストで実施している教科・科目の筆記試験をもとに、本学で学ぶために必要な総合的な基礎学力を「知識・技能」を中心に判定を行い、大学入学共通テストの得点のみで合否判定を行います。
1月出願においては、総合政策学部3科目英数型を除く文系学部は「外国語」「国語」を必須として、「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点を採用する方式を3科目型、5科目型の方式で実施します。また「外国語」「国語」「数学」「地理歴史・公民」「理科」を必須とする 7 科目型を実施します。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。
3月出願においては、文系学部は「英語」を必須とし、「国語」「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点科目を採用する方式を実施しています。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。
また、大学入学共通テストを利用する入学試験（1 月出願　英語資格・検定試験活用型）は、「読む」「書く」「聞く」「話す」の英語の 4 技能を身に付けた生徒を選抜するために、提出された書類のうち英語資格・検定試験のスコアを出願資格として高く評価し、大学入学共通テストの教科・科目の得点を活用して実施する入学試験であり、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を得点として評価し、検定試験に取り組んだ「主体性」を高く評価します。

2．グローバル入学試験
グローバル入学試験は、入学後、本学のスーパーグローバル大学創成事業におけるインターナショナル・プログラム（国際教育プログラム）に積極的に取り組むことを希望する生徒や、将来、国際的な活躍を目指す生徒を対象に3つのカテゴリーで実施する入学試験です。
2－①　国際的な活躍を志す者を対象とした入学試験
国際的な活躍を志す者を対象とした入学試験は、関西学院大学のインターナショナル・プログラム（国際教育プログラム）において国際社会で活躍する能力を身に付けることを志し、秀でた英語コミュニケーション能力を有した上で、国際交流体験による異文化社会における経験、もしくは国際的課題に関して興味をもち、課題解決のための提案・実践に意欲を有する者を対象とした入学試験です。出願資格として、英語資格・検定試験において CEFR B1 程度以上を有した上で、海外における留学経験を有する生徒、模擬国連等に取り組み問題解決能力を育んだ生徒、全国レベルの英語弁論大会・英語エッセイコンテスト等において入賞実績を有

有・無

する生徒を対象に設定し、調査書等の提出書類とあわせて、「主体性」を中心とした書類審査を行います。さらに、英語を題材とした論述試験、日本語小論文試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査では志望する学部の面接（口頭試問含む）により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。

２－② インターナショナル・バカロレア入学試験
インターナショナル・バカロレア入学試験は、関西学院大学のインターナショナル・プログラム（国際教育プログラム）において、国際社会で活躍する能力を身につけることを志す者で、国際的に認められた大学入学資格であるインターナショナル・バカロレアDP（ディプロマ・プログラム）の課程を修了後、統一試験に合格し、インターナショナル・バカロレア資格を有する者を受け入れるための入学試験です。出願時においてフルディプロマを取得済みの者でスコアが 32 ポイント以上の者、もしくは取得見込で IB PREDICTED SCORE が出願時に 32 ポイント以上であるものは英語論述審査が免除となります。
また日本の一条校において上記のスコアを有する者は日本語小論文が免除となります。これに満たない者については、英語を題材とした論述試験・日本語小論文試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価する一次審査を行います。二次審査においては学部の面接（口頭試問含む）により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。

２－③ グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験
グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験は国際的に活躍する科学者や技術者となることを志し、自然科学に関する科目について一定の学力を有し、秀でた英語コミュニケーション能力を有する者、インターナショナル・バカロレア資格を有する者、高等学校在籍時に海外において自然科学に関する教育を受けた経験を有する者もしくは自然科学分野における特記すべき国際交流経験を有する者、国際科学技術コンテストに出場した経験を有する者を出願資格として設定し、調査書等提出された書類とあわせ「主体性」を中心に書類審査を行います。
また、入学後必要な数学、理科の基礎知識を問う筆記試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を中心に評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査では志望する学部の面接（口頭試問含む）により学ぶ意欲や「主体性・多様性・協働性」について評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し選抜を行います。

３. 推薦入学
推薦入学は高等学校長の責任ある推薦により本学で学ぶために必要な学力を有する生徒を受け入れるものです。審査においては調査書、自己推薦書、志望理由書、学校長推薦書等の提出書類による書類審査と面接（口頭試問含む）を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。
３－① 院内推薦入学
３－①－１）関西学院高等部
関西学院高等部推薦入学は関西学院の一貫教育の大きな柱として位置づけられています。高等部でキリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、他の入学者に対しても良い影響を与え関西学院の学風を担うことを期待し実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接（口頭試問含む）を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

３－①－２）関西学院千里国際高等部
関西学院千里国際高等部推薦入学は、千里国際高等部の特色である国際教育と、キリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接（口頭試問含む）を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

３－② 継続校推薦入学
啓明学院継続校推薦入学は、キリスト教主義教育により学んだ啓明学院高等学校の生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接（口頭試問含む）を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

３－③ 提携校推薦入学
関西学院大学提携校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、各校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接（口頭試問含む）を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

３－④ 協定校推薦入学
３－④－１）キリスト教学校枠
関西学院大学協定校推薦入学は、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接（口頭試問含む）を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

３－④－２）グローバル枠
関西学院大学協定校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。21 世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接（口頭試問含む）を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

３－④－３）グローバル＋キリスト教校枠
関西学院大学協定校推薦入学は、21 世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れ、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒をも受け入れるために実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接（口頭試問含む）を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

３－⑤ 指定校推薦入学
指定校推薦入学は一定の学力を有する生徒を高等学校長の責任に基づく推薦を受け、書類審査・面接（口頭試問含む）によって総合的に評価し受け入れるための制度です。出願書類と面接（口頭試問含む）において、一定水準以上の「知識・技能」、各学部で学ぶために必要な「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」が備わっているか等を評価し、入学後の勉学における明確な志向および意欲の評価に重点を置き総合的に審査しています。

神学部
関西学院大学神学部において勉学することに強い意欲をもつ、成績優秀な生徒を推薦によって求め、総合大学の特色を生かし、豊かな人格を培い、幅広い一般諸学の教養と深い神学的素養とを身に付けさせ、社会に仕える者を育成することを目的とします。審査に際しては、志願提出書類と面接（口頭試問含む）を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

３－⑥ 指定校推薦編入学
関西学院大学指定校推薦編入学制度では、指定校学校長の責任に基づいて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」等の能力や資質を有すると判断され推薦された学生を、各学部が書類審査・面接等を通して総合的に評価し、編入生として受け入れます。

神学部
指定校推薦編入学制度では、関西学院聖和短期大学に特有のキリスト教主義に基づく保育者育成教育を受け、上述のとおり推薦された学生のうち、将来において伝道者あるいはクリスチャンワーカーとして社会に貢献することを志してキリスト教神学の理解をさらに深めることを願う者を、書類審査、面接（口頭試問含む）等を通して総合的に評価し、編入生として受け入れます。

4.　探究評価型
関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service（奉仕のための練達）”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命としています。その使命を具現化できる、意欲に満ちた受験生を求め、本入学試験を実施します。
本入学試験では、本学で学ぶにふさわしい知識・技能、思考力・判断力・表現力を有しているだけでなく、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を発見し、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を持ち、多様な人々と協働して学ぶ態度を身につけた生徒を求めています。
第一次審査においては書類審査を行います。横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して培った力を提出書類にて多面的、多元的に評価します。
さらに第二次審査において、学部毎に面接・集団討論・プレゼンテーション・口頭試問を行います。高等学校での学びを通じて培ったありのままの力を評価しますので、入学試験のために特段の準備を必要とするものではありません。
出願資格として、英語資格・検定試験スコア CEFR A2 レベル以上を有する者と設定しています。

5. UNHCR 難民高等教育プログラムによる推薦入学
「UNHCR 難民高等教育プログラムによる推薦入学」は、関西学院大学と国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連 UNHCR 協会との協定に基づき実施する入学制度です。これは本学の建学の精神に基づく「人類の幸福と平和に資する世界市民の育成」を現代に即したかたちで実現するためのものです。
日本で生活する難民の方々は、厳しい環境下におかれています。特に教育面では、本人や家族の経済的事情や、母国での出身校の卒業証明が得られないなどの理由で、高等教育を受ける機会を失っている場合が少なくありません。それが就労条件の悪化、さらには、経済的事情の悪化につながっています。
こうした状況を少しでも改善することを目的とするこの推薦入学制度で入学した生徒が、高い教養と専門性を身につけ、将来、日本、母国あるいは国際社会において平和の構築や社会の発展を支える人材へと成長することが期待されています。また関西学院大学で共に学ぶ他の学生にとっても、迫害や戦争といった国際社会が抱える問題を身近に捉えるとともに、日本国内の国際化を意識する機会となります。
国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連 UNHCR 協会の推薦に基づき、面接（口頭試問含む）を行い本学で学ぶ意欲を中心にしながら「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」について評価を行います。

6. スポーツ選抜入学試験
この選抜入学試験制度は、スポーツ活動において優れた能力と競技実績を有し、入学後は学業と課外活動を両立させる強い意欲をもつ者を積極的に受け入れ、本学における教育の活性化と課外活動の一層の振興に寄与することを目指すものです。
提出された書類に基づきスポーツ実績を評価するとともに、本学で学ぶにあたっての基礎学力、知識、表現力、論理的思考力を筆記試験により評価を行います。
一次合格者に対する二次審査は面接（口頭試問含む）を実施し志願する学部で学ぶ意欲を中心に評価を行います。

7.学部特色入学試験
関西学院のスクールモットーは“Mastery for Service”。 これは、第 4 代院長 C. J. L. ベーツ宣教師が学生たちに与えた言葉で、「奉仕のための練達」と訳されています。わかりやすく言えば、「人々に奉仕できる、社会に役立つ知識と人間性を、自らの主体性を持って磨き上げよ」ということです。関西学院大学では、その教育目的を具現化できる、意欲に満ちた受験生を求めています。
特に、本学で学ぶにふさわしい知識・技能、思考力・判断力・表現力を有しているだけでなく、各学部が求める多様な能力や、様々な経験や活動を通じて身につけた豊かな人間性をもった学生を求めています。

神学部
関西学院大学神学部は、1889 年の関西学院創立と同時に設置された、最も古い伝統ある学部です。神学部はその設立時からキリスト教の伝道者育成を主要な目的として掲げています。1952 年に新制大学の一学部として開設されてからも、学術的な質を高めつつ、高度な専門性を持つ伝道者・クリスチャンワーカーの育成に力を注いで来ました。
世界の動向を視野に入れ、21 世紀における日本と世界のキリスト教宣教を担うためには、将来の伝道者・クリスチャンワーカーがしっかりしたキリスト教に関する専門的な知識を身につけるとともに、社会の諸現象への深い洞察力を持ち、他の諸分野と学問的な対話をする力を養う必要があります。
本学部では、このような趣旨に基づき、学力審査では十分にはかることのできなかった多彩な能力を評価するため学部特色入試を行います。この学部特色入試では、自分自身の考えを表現し、対話する能力を評価するとともに、キリスト教信仰に根ざして伝道者・クリスチャンワーカーとなろうとする志、社会での経験や異文化との出会い、自分らしい思考や資格を重んじています。高校生、社会人、 外国人留学生や帰国生徒などの枠を越えて、広く志願者を募っています。
入学者選抜に際しては上述の趣旨にのっとって総合的に判断しますが、提出された書類・調査書及び講義・リポート課題によっておもにキリスト教理解を中心とした「知識・技能」と志望動機とを評価し、面接（口頭試問含む）によっておもに「思考力・判断力・表現力」と「主体性・多様性・協働性」を評価します。

学生支援に関する方針	変更の有無
少人数教育の利点を生かし、学生各自のニーズをきめ細かく抽出し、能力や特性に応じた支援を以下の通り行う。 1）個別ケースごとに支援を検討する。 2）必要に応じて学内関連機関（総合支援センター・保健館など）との連携において情報共有し、本人との面談を実施、場合によっては保証人への連絡および面談の実施、などを通じて支援を行う。 3）当該学生のプライバシーの保護を尊重したうえで、学部長室委員会や教授会において学生の動向報告として情報を共有し、支援の内容をはじめ、広く学生への対応に関しても意見交換を行う。 4）全学で定める方針がある場合にはそれに従い、上記に則って学生への支援を模索する 修学支援 入学前・初年次教育 大学での勉学に円滑に移行することを意図し、基礎学力を見直すための入学前教育を実施。入学予定者に対して、全学的枠組みによる通信教育（「英語」「国語」の2科目）、もしくは学部独自の「読書」の課題を課した。また、2022 年度入学生のうち、各種入試合格者に対しては1日入学前体験として、プレスチューデント・プログラムをオンラインにて開催し、「神学入門」等をテーマに講義を実施した。全入学生を対象には、履修など教務関連・奨学金など学生生活における注意事項や説明等を行う「新入生オリエンテーション」を実施。履修指導において、各種プログラムの案内や神学部・大学での学びについて確認するとともに、学生生活に関する問い合わせを受ける機会を設ける。また、在学生（2年生以上）も学生スタッフとして参加し、上級生との繋がりを構築する。 その他、初年次教育としていわゆる基礎ゼミである1年次の「基礎演習」において、学内のキャリアセンタースタッフ、学生カウンセラーなどと連携したプログラムを展開。神学部での学びと社会との接点を考える「ライフデザインセミナー」、あるいは自身をみつめ、友人とのつながりを構築するきっかけとする「心理適性テスト」やワークショップを実施。また大学図書館スタッフの協力を得て、大学図書館および各種データベースの利用法を学習するプログラムも実施し、卒業後の進路を見越した大学での学びを促す。 途中退学防止（アカデミック・アドバイザー制度） 全学年を通して中途退学防止の施策を実施する。学期毎のGPAが著しく低い、また修得単位数が標準を大きく下回る学生に対し、通知の上面談（教務担当教員ならびに学生担当教員および事務担当者）を行い、以降の履修計画を検討する際のサポートをしている。履修上のことだけでなく、進路や生活上の悩みなどを直接ヒアリングすることにより、修学を継続するに適切な教育面・制度面でのアドバイスができるよう、相談態勢を整える。 TA・LAの活用 神学研究科の大学院生から2名のTA（ティーチング・アシスタント）を採用し、「英語」や「新約聖書ギリシャ語」などの語学（古典語を含む）、あるいは「新約聖書入門」などの入門科目に配置。授業担当者とも相談の上、授業内講義の補足説明や授業中に実施した小テストの採点、配慮が必要な学生への対応補助などを行う。また授業としてフィールド・ワークを実施する場合、その付き添い、補助なども担当する場合がある。 1年次の「基礎演習」には、別途トレーニング（全学研修，学部集中講義）を受けた上級生（2年次以上）がラーニング・アシスタント（LA）として、授業の内外において研究発表やディスカッション、PCの活用、文献の探し方やリポートの書き方等をサポートする。 障がい学生に対する支援 全学で定める方針に従い、個別ケースに応じた対応・支援を模索する。 生活支援 長期授業欠席学生 アカデミック・アドバイザーの副学部長教務担当、副学部長学生担当を中心に、1・2年生の基礎演習や語学科目、3年生以上の演習科目を中心に学生の授業への出席状況を定期的に確認。欠席が目立つ場合は呼び出しのうえ面談をおこなって状況を把握するようにつとめ、必要な場合は保証人への連絡もおこなうなど、細やかな対応を行う。本人の希望によっては学内の自立支援コーディネーター、学生カウンセラー、医師・看護師とも連携の上、対応を図る。それらの情報は継続的に記録し、学部長室委員会ならびに教授会でも情報を共有、対応について懇談する。 各種ハラスメント 全学で定める方針に従い、授業内またはガイダンスなどにおいて周知・指導を行いつつ、個別ケースに応じた対応を模索する。 進路支援 低年次の演習科目およびそれに準ずる科目において、キャリア教育・支援プログラムを実施する。企業の最新の動向を把握すべく、キャリアセンターにも意見を聴取し、キャリア形成のための自覚を促す。「研究演習」に所属する学生に対しては各ゼミを通じて各種セミナーへの参加を勧める。希望のある学生については面談を行い、キャリアセンターと情報を共有する。とりわけ、伝道者コースで日本基督教団の牧師・教師を志す学生に対しては、学部独自の説明会を実施するほか、教会の紹介などを行う。 神学生の出席教会の牧師とは、年一回懇談会をもち、情報の共有につとめる。	有・無

教員像	変更の有無
1. 優れた神学研究者であること 2. 高い人権意識を有していること 3. 福音主義の教職者である事が望ましい	有・無

教員組織の編制方針	変更の有無
神学部教員組織編制方針 1. 神学部の専任教員は、原則として神学関係の分野において博士学位を有し、また継続的かつ発展的に研究を行う者とする。 2. 伝道者養成という学部設立の理念・目的を達成するため、教員は福音主義の教職者を中心とする。しかし、分野・業績・教歴などを勘案して、信徒の教員を採用することを妨げない。 3. 聖書学（旧約・新約）、歴史神学・キリスト教文化、組織神学、実践神学の各分野に、適切な人員を配置する。 4. 年齢構成、ジェンダー・バランスを考慮した編制を行う。	有・無

2. 実施計画

（1）必須型

実施計画（タイトル）	1-（1）-① 「Kwansei コンピテンシー」の策定と運用	帳票の有無	不要
内容	本大学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」（「Kwansei コンピテンシー」）を時代に即して新たに定め、各学部はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP（ディプロマポリシー）を再策定する。 また、策定された「Kwansei コンピテンシー」を基に大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」の到達状況を測定、評価する取組を推進する。		
学部独自の取り組み内容			

＜指標 1＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標				
目標				
実績				
＜指標 2＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標				
実績				

※学部における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

実施計画（タイトル）	1-（1）-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進（3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備）	帳票の有無	不要
内容	本学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」（「Kwansei コンピテンシー」）を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」である DP（ディプロマポリシー）を策定する。この DP は、すべての学生が卒業／修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は（a）DP の再確認（b）DP と CP（カリキュラムポリシー）の整合（c）シラバスの実質化（d）シラバスに沿った成績評価（e）DP と AP（アドミッションポリシー）の連動、を厳格に運用する。 本学はこうした学部／研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。		
学部独自の取り組み内容	学部『授業科目履修の手引』への掲載及びウェブにて公開し、新入生・在学生にはそれぞれ年度始めの履修指導の機会に周知している。 ３ポリシー（ＤＰ・ＣＰ・ＡＰ）及び設置科目における相関図を策定・明示し、ＦＤ研修会・カリキュラム研究委員会等の場で確認・検証を行っている。ＦＤ研修会については年１回非常勤講師を対象にも開催しており、年度により議題として取り上げている。		

＜指標 1＞	毎学期実施する「学修行動と授業に関する調査」における質問項目「あなたはこの授業を通して、卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。」に対する肯定的回答「そう思う」「どちらかというとそう思う」の割合			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	65.0%以上	65.0%以上	70.0%以上	70.0%以上
実績	約 80.5%	約 77.0%	約 71.8%（春学期実績） ＊秋学期科目が未実施のため	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）
実績				

＜指標 2＞	毎学期実施する「学修行動と授業に関する調査」における質問項目「この授業の意義・目的、カリキュラムにおける科目の位置づけについて説明があった。」に対する肯定的回答「そう思う」「どちらかというとそう思う」の割合			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	70.0%以上	70.0%以上	75.0%以上	75.0%以上
実績	約 82.4%	約 80.8%	約 67.0%（春学期実績） ＊秋学期科目が未実施のため	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）
実績				

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

DP・CPに基づいたカリキュラムの総括的な検証を行い、『神学基礎テスト』を進級試験として実施した。

オンライン授業において海外のゲストスピーカーと交流することで Virtual Exchange を実施するなど、オンライン授業ならではのメリットを生かした授業を実施した。授業調査の結果より、Virtual Exchange 科目の検証を行い、引き続き画期的な授業方法を検討する。

神学部の特色あるプログラムとしてディアコニア・プログラムを実施しており、2022 年度はディアコニアの専門家を専任教員として採用し、さらにプログラムの内容の充実を図った。

実施計画（タイトル）	1-（9）-① 入試制度改革への対応	帳票の有無	不要
内容	グローバル化や情報化の進展、少子高齢社会の到来など社会の在り方が急速に変わり、予測が難しい状況の中で、自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための力が必要とされており、2015 年 1 月に文部科学省より「高大接続改革実行プラン」が発表され、高大接続改革は、「高校教育」「大学教育」そしてそれをつなぐ「大学入学者選抜」の一体的な改革で、それぞれについて様々な施策が進んでいる。「大学入学者選抜改革」においては、これまで以上に多面的・総合的に人物を評価する入試への転換を掲げ、大学入試センター試験を廃止し、思考力・判断力・表現力を一層重視した「大学入学共通テスト」を 2020 年度（2021 年 1 月実施）より導入。大学入学共通テストでは、国語と数学に記述式問題を導入すること、英語については 4 技能を適切に評価するため民間の資格・検定試験を活用することが決まっている。また、各大学の個別選抜では、アドミッション・ポリシーの明確化とともに、より多面的な選抜方法にすることが求められている。一方、AO 入試や推薦入試では、一部で「学力不問になっている」といった批判があることから、小論文やプレゼンテーション、大学入学共通テストなどを通じて、学力を問う試験を必須化する方針も示されている。 このような状況において、本学においては学長が入試委員長として全学部長が入試委員となる入試委員会が中心となり、以下のような入試制度改革を進めていく。 1. 高大接続改革で求められる入試制度改革への対応 上記の改革を進めるため、本学ではすべての入試において「学力3要素」を評価する入試へと変えていく。また、SGU でもある本学においてはすべての入試において英語の4技能を評価する入試へと変えていく。合わせて、各種入試においても、現行やや一芸入試的な色合いの濃い AO 入試においては高等学校での活動をしっかりと評価する入試への変更を、そして、現行 SGH・SSH 指定校に限定している公募推薦入試も課題研究を実践しているすべての高等学校に拡大し、高等学校での探究活動を評価する入試へと変更させていく。 2. 現行入試制度・募集人員の再検討 上記のような国の高大接続改革が進むと、例えば、国公立大学では AO 入試の割合が増加する。また、18 歳人口の減少という人口構造の変化（少子化）により、より一層前倒し（各種入試への定員のシフト）によって学生を確保する必要が生じる。今後、各種入試と一般入試の定員比率の再検討とともに、各種入試の定員の見直しを進める必要がある。 3. 主体性等を評価するための入試体制強化やアドミッションオフィサー配置 上記のとおり、今後の大学入試においては、学力3要素を評価するため、小論文やプレゼンテーション、課題研究論文、面接や調査書など高等学校への学びをひとりひとり丁寧に評価する入試が拡大してくる。それに伴って当然、これまで入試選抜を担ってこられた教員だけでは対応することが困難となる。そのため、職員からも提出書類の評価を行うアドミッションオフィサーを配置することが求められる。今後、アドミッションオフィサーへの入試評価業務の委嘱を進めていく。		
学部独自の取り組み内容	２０２２年度実施各種入試の統廃合案を受け、神学部の入学試験について検討した。神学部で行われていた「学部特別選抜入学試験」を、全学的施策に合わせて「学部特色入学試験」と名称変更することとした。神学部ではキリスト教伝道者コースを対象として行われていた「帰国生徒入学試験」が、全学的に「グローバル入学試験」に統合されることになったため、神学部において特別に帰国生徒だけを対象とした入試は行わず、「学部特色入学試験」に出願枠を設けることで帰国生徒を募集することとした。 また、高校から大学での勉学へ円滑に移行することを目的に、入学前学習として、プレスチューデント・プログラムを開催する。入学への準備状況を確認するとともに、学生生活に関して事前の問い合わせを受ける機会を設ける。		

＜指標 1＞	高大接続改革で求められる入試制度改革に対する対応の有無、及び 制度の検証を重視したＰＤＣＡサイクルの確立			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	新しい入試制度のもとで安定的に試験を実行する	入試の安定的な実行とともに制度の検証を行う	入試の安定的な実行とともに制度の検証（場合によって見直し）を行う	入試の安定的な実行とともに制度の検証（場合によって見直し）を行う
実績				
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）
実績				

＜指標 2＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標				
実績				

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

2021 年度入試（2020 年度実施）、2023 年度入試（2022 年度実施）において新たな入試制度が導入された。2023 年度入試（2022 年度実施）においては、2022 年度までに策定された試験内容・審査基準にのっとり思考力・判断力・表現力を問う試験を行った。

今後については、2023 年度入試（2022 年度実施）の入試制度の統廃合をふまえて、現行の入試制度を検証し、それに応じた制度を再構築していく。

実施計画(タイトル)	1-(12)-⑧ シラバスの実質化	帳票の有無	不要
内容	組織的な教育力を向上するため、三つのポリシーに基づく教学マネジメントを推進することが中心的な課題であり、そのための重点戦略としてシラバスの精緻化から取り組む。特に「授業目的」と「到達目標」を明確にすることで、カリキュラム全体の中での科目の位置づけや他の科目との比較が可能になり、科目間の相互関係を整理する契機となる。それによって CP や DP の適切性・妥当性といった上流に遡ることが可能となる。また、シラバスの精緻化は、授業外学修時間の増加につながる。		
学部独自の取り組み内容	授業担当者には、シラバス作成の際、特に「到達目標」項目の記述にあたって神学部におけるＣＰ及びカリキュラム・マップの要素を意識・反映した記述を依頼している。また、大学の方針に則ったシラバスの第三者チェックを実施し、「授業目的」を含めたシラバスの精緻化を図っている。		

＜指標 1＞	毎学期実施する「学修行動と授業に関する調査」における質問項目「あなたは、シラバスをきちんと読んだうえでこの授業を受講していますか。」に対する肯定的回答「そう思う」「どちらかというとそう思う」の割合			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	70.0%以上	70.0%以上	75.0%以上	75.0%以上
実績	約 88.8%	約 87.7%	約 89.8%(春学期実績) ＊秋学期科目が未実施のため	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	(2023 年度を目処に決定)	(2023 年度を目処に決定)	(2023 年度を目処に決定)	(2023 年度を目処に決定)
実績				

＜指標 2＞	毎学期実施する「学修行動と授業に関する調査」における質問項目「この授業は、シラバスに示された授業方法に基づいて、各回の内容に沿って進行していた。」に対する肯定的回答「そう思う」「どちらかというとそう思う」の割合			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	70.0%以上	70.0%以上	75.0%以上	75.0%以上
実績	約 71.9%	約 85.0%	約 80.6%(春学期実績) ＊秋学期科目が未実施のため	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	(2023 年度を目処に決定)	(2023 年度を目処に決定)	(2023 年度を目処に決定)	(2023 年度を目処に決定)
実績				

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

シラバスの第三者チェックを行うなかで、主として授業目的、到達目標、成績評価に関する6項目について確認している。指摘事項については必要に応じて授業担当者に修正を依頼している。今後は更に精緻な内容を目指すとともに、授業の実際とも比較・検証を可能にするために、教員間による授業見学の実施など検討を進めたい。

また、各科目の授業目的や到達目標、カリキュラムの位置づけについて周知徹底すべく、シラバス上で授業担当者から履修者に対しカリキュラムマップの要素を意識しての説明を依頼した。

実施計画（タイトル）	1-（13）-② 教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組み確立	帳票の有無	不要
内容	教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組みを確立し、学生の学びをサポートし、残留生、退学者をださないキャンパスを目指す。アカデミックアドバイス制度は実施から4年がたち、現在行われている対象学生の見直しなどの検討も必要となっている。 ― 以下、SGU時の文章 ― 本学では、従来から成績不振者へのサポートを目的とした様々な指導を学部ごとに実施してきたが、GPAのさらなる活用と学生に対してより適切かつ高度な学修支援を行うという観点から、2015 年度より「アカデミックアドバイザー制度」を全学的な仕組みとして導入する。 アカデミックアドバイザーは、学部ごとに人数を定め、学部所属の専任教員から選出するものとする。各学部は修得単位数、GPA、出席状況のいずれか、もしくは複数を用いて指導対象となる学生の基準を定める。指導対象学生に対しては、アカデミックアドバイザーが個別面談および学修指導等の修学上の支援を行う。 制度導入後は、教育力向上（ファカルティ・ディベロップメント）部会において本制度の運用状況に関する情報共有を行い、より一層の改善等に取り組む予定である。		
学部独自の取り組み内容	残留生数・退学者数を減らすため、学びのサポートを主眼としてＧＰＡ不振者（各学期 1.0 以下の者）を中心にアカデミックアドバイザーである教員と教務あるいは学生担当職員による面談を実施している。さらには、成績評価に先立ってサポートの必要な学生を抽出することを意図して、授業への出席不振者についても低学年次の必修科目（「基礎演習」「英語」等）を中心に情報収集・共有に努めている。それら学生指導に関する情報及び面談などの経過は、学生ごとに事務室において保管され、必要に応じて教授会レベルで共有の上、ゼミナール指導教員、学年担任の指導に活用されている。また特に伝道者コースの学生においては、教会生活について出席教会の牧師と懇談会を行い、情報を共有している。		

＜指標 1＞	GPA不振者（各学期 1.0 以下の者）へのアカデミックアドバイザー面談の実施率（実施数/対象者数）			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	50/0%以上	50.0%以上	60.0%以上	70.0%以上
実績	15.0%(COVID19 影響し低い)	56.5%	81.8%	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）
実績				

＜指標 2＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標				
実績				

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

アカデミックアドバイザーである教員と担当職員による面談について、2022 年度春学期は 10 名（対象者 13 名）、秋学期は8名（対象者9名）と面談を実施した。昨年度はオンラインとの併用での面談だったが、今回は対面での面談を実施した。対象者のうち春学期は3名、秋学期は1名とは連絡がつかず、面談を行うことができなかったが、対象学生への連絡等をこまめに行うことで昨年度に比べると面談の実施率は向上した。今後は面談内容の更なる充実に加え、面談実施率向上のため、引き続き連絡がつかない学生へのコンタクトの取り方、総合支援センターとの連携の在り方などについて検討していきたい。
なお、2020 年度より、指標1を卒業時調査ではなく、アカデミックアドバイザー面談の実施率に変更している。

実施計画（タイトル）	1-（13）-③　TA・LA・SAの活用推進	帳票の有無	要
内容	LA の配置により、授業での教育支援（教員への支援を含む）、授業外での学修支援を強化する。初年次教育である導入科目等を対象としたLAについては制度開始から7年がたち、今後の在り方は新たなライティングサポート制度と合わせて考えていく。 SA については、特に全学科目情報科学科目の現状の課題を抽出し、現状のままか、外部委託するかを検討する。 TAについて各学部では、①大学院生の減少で確保が難しい、②大学院生全員にあたらない、③月額報酬の場合、報酬に対して実働が少ない、人によって実働に差が生じる、④確保したいが他研究科生を重複採用できない、などの課題があり、①業務実働に合わせた報酬制度、②他研究科生の重複採用、③外部委託、などを検討することが考えられる。		
学部独自の取り組み内容	ＬＡは４名を初年次のキリスト教教育科目（週２講時）にて活用している。授業内においては質問対応、指導補助等で教育支援を、授業外においては指導及び質問対応で学修支援を行っている。ＴＡは２名を言語科目やキリスト教神学の入門科目に、各学期週３講時（平均）にて活用している（本年度は１名が春学期に４講時、秋学期に２講時、１名が春学期に３講時、秋学期に３講時である）。		

＜指標 1＞	ＴＡ・ＬＡが教育支援を行う科目について、毎学期実施する「学修行動と授業に関する調査」における質問項目「あなたは、この授業に積極的に取り組んだと思いますか。」に対する肯定的回答「そう思う」「どちらかというとそう思う」の割合			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	65.0%以上（対象科目平均）	65.0%以上（対象科目平均）	70.0%以上（対象科目平均）	70.0%以上（対象科目平均）
実績	約 95.0%	約 92.9%	約 80.0%（春学期実績） ＊秋学期科目が未実施のため	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）
実績				

＜指標 2＞	ＴＡ・ＬＡが教育支援を行う科目について、毎学期実施する「学修行動と授業に関する調査」における質問項目「あなたはこの授業を通して、卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。」に対する肯定的回答「そう思う」「どちらかというとそう思う」の割合			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	65.0%以上（対象科目平均）	65.0%以上（対象科目平均）	70.0%以上（対象科目平均）	70.0%以上（対象科目平均）
実績	約 91.0%	約 78.6%	約 80.0%（春学期実績） ＊秋学期科目が未実施のため	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）
実績				

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

（LA）2022 年度は「基礎演習A・B」の授業においてLAを活用し、授業内外において指導補助及び質問対応等を通じて教育と学修の支援を行った。また、2021 年度のカリキュラム改編を機に対象科目を再度検討し、「教会と礼拝体験」においてもLAを活用し、日曜日の礼拝参加の補助と指導を実施した。
（TA）2022 年度は1名を「英語（リーディング）甲・乙」「キリスト教の歴史（宗教改革以降）」「新約聖書ギリシャ語Ⅰ」「英語（総合）甲・乙」の授業において、もう1名を「新約聖書入門Ⅰ」「英語（リーディング）甲・乙」「新約聖書時代史」「英語（総合）甲・乙」の授業において活用した。授業における TA の参加／貢献度を評価しつつ、どの科目に TA を配置すべきかについて継続的に評価している。

実施計画（タイトル）	8-（2）-① KGI・KPIの設定・活用	帳票の有無	不要
内容	非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム（成果）を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」（超長期ビジョン・長期戦略）および中期総合経営計画（実施計画・基盤計画）の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取り組みに活用する。		
学部独自の取り組み内容			

＜指標 1＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標				
目標				
実績				

※本帳票の末尾において、学修成果を測定する学部独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度学部における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。

＜指標 2＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標				
実績				

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

実施計画（タイトル）	8-（10）-① 内部質保証体制の確立と運用	帳票の有無	要
内容	本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画（ 含む）であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。 両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。 このため、本学では、2019 年度から各学部／研究科、短期大学・各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。		
学部独自の取り組み内容			

＜指標 1＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標				
目標				
実績				

※2020 年度入学生より、「Kwansei コンピテンシー」を獲得することを念頭に置く旨を、各学部のディプロマ・ポリシー（DP）に追記済。

＜指標 2＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標				
実績				

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

（2）選択型

実施計画（タイトル）	1-（11）-② 学部におけるハンズオン・ラーニングプログラムの推進	帳票の有無	要
内容	SGU ダブルチャレンジ制度では、アウェイチャレンジ（①インターナショナルプログラム、②ハンズオン・ラーニングプログラム、③副専攻プログラム）の単位を修得して卒業する学生数（実数）を指標としており、SGU最終年度の 2023 年度においては 5700 名を目標数値としている。その 5700 名のうち約 3000 名が②ハンズオン・ラーニングプログラムの単位を修得することがもう一つの目標値である。目標である 3000 人を達成するためには、ハンズオン・ラーニングセンター開講科目の単位修得者数を増加させることはもちろんではあるが、学部におけるハンズオン・ラーニングを推進し、学部開講ハンズオン・ラーニングプログラム単位修得者数の増加を図らなければならない。		
学部独自の取り組み内容	インターナショナルプログラムとして「Mission in Dialogue A・B」を開講する。経済、文化、宗教的に注目されるアジア、ことに教会の成長が著しい韓国のキリスト教に焦点を当て理解するとともにアジアにおけるキリスト教の宣教的課題について考察する。韓国の大学生（監理教神学大学）と合同で受講するプログラムとして隔年で A・B を開講するが、A は韓国で実施（韓国へ本学の学生を派遣）、B は日本で実施（本学に韓国からの大学生を受け入れ）する。また別に開講する「Theology in Dialogue」では、日本キリスト教協議会（NCC）宗教研究所との協定に基づき、ドイツやスイスから受け入れた学生とともに、日本のキリスト教や仏教など他宗教について学ぶ機会を準備している。		

＜指標 1＞	「Mission in Dialogue A・B」及び「Theology in Dialogue」の参加者数及び本学神学部生の割合			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	・参加者数 10 名（全体） ・本学学生の割合 30.0%	・参加者数 10 名（全体） ・本学学生の割合 30.0%	・参加者数 15 名（全体） ・本学学生の割合 40.0%	・参加者数 15 名（全体） ・本学学生の割合 45.0%
実績	0 名 ＊COVID-19 感染拡大のため各プログラムが中止	参加者数は全体で 19 名 本学学生の割合は 47.4%（9 名）	参加者数は全体で 20 名 本学学生の割合は 40.0%（8 名）	
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）
実績				

＜指標 2＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標				
実績				

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

Mission in Dialogue は、韓国の監理教神学大学との協約に基づく、1 年毎に訪問による学修と学生間のディスカッションを行う国際交流プログラムである。2022 年度は監理教神学大学が関西学院大学神学部を訪問する年度であったが、両国の COVID-19 の感染拡大状況を鑑み、Zoom を用いた Virtual Exchange Program を実施した。関西学院大学神学部の学生 6 名・教員 1 名、監理教神学大学学生 8 名・教員 1 名が参加し、8 月 10 日には両国のキリスト教の歴史と特徴およびコロナ禍におけるキリスト教・教会・神学部の状況と取り組みについて講義がなされた。8 月 11 日にはコロナ禍で浮き彫りになったキリスト教と社会の問題にいかに向き合うか、さらにその状況のもと日韓交流を通して相互に何を伝えたいか、ということについて、学生によるプレゼンテーションと討議が行われた。8 月 12 日は全体討議が行われ、相互に質疑応答や、交流の時をもつことができた。

Theology in Dialogue は秋学期に開講しているが、留学生 4 名の参加に対し、残念ながら本学学生の受講は 2 名となった。

3. 神学部のKPI

（1）学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
DPに定める資質・能力の獲得状況	あなたはこの授業を通して卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。（「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価） 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、上位2つ （A「そう思う」、 B「どちらかといえばそう思う」） の回答割合（%）	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Kwansei コンピンテンシー獲得状況	知識・能力・資質の程度　全項目 （「大変身についた」～「全く身についていない」の5段階評価） （2018～2022 年度） 当該年度卒業生と次年度 1 年生との調査による伸び （2023～2027 年度） 当該年度卒業生とその 1 年生時との調査による伸び 「IR 新入生調査」「IR 卒業時調査」	5段階評価のうち、上位2つ （「大変身についた」「やや身についた」）の回答割合（%）の平均の差	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
汎用的能力の獲得状況	入学後の能力変化（表外※参照） （「大きく増えた」～「大きく減った」の5段階評価 「IR 上級生調査」	5段階評価のうち、上位2つ （A「大きく増えた」、B「増えた」） の回答割合（%）	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業外学修時間	授業外時間に、授業課題や準備時間、復習をする時間（一週当たりの平均） 「IR1 年生調査、IR 上級生調査」	一週あたり 6 時間以上の割合	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業目的・到達目標の達成度	あなたは、シラバスに示された授業の目的や、到達目標を達成できると思いますか。（「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価） 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、 A「そう思う」、 B「どちらかというとそう思う」 の回答割合(%)	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業満足度	あなたは、全体としてこの授業に満足していますか。 （「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価） 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、 A「そう思う」、 B「どちらかというとそう思う」 の回答割合(%)	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
留学等派遣数	協定校への派遣学生数 「国際連携機構資料」	大学間協定に基づく派遣日本人学生数	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
TOEIC/TOEFL 等の英語運用能力	SGUの取組みで確認している TOEFL 換算得点目標の達成人数 ＜参考（学部別目標値）＞ ■国際：TOEFL 換算 550 点 ■文・総政：TOEFL 換算 540 点 ■その他：TOEFL 換算 520 点 「SGU に関する調査」	左記「TOEFL 換算得点」目標の達成人数（人）	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
学生生活満足度	大学生活を振り返って、学生生活は満足したものでしたか。 （「満足」～「不満」の5段階評価） 「IR 卒業1年目調査」	5 段階評価のうち、上位2つ （A「満足」、B「そこそこ満足」） の回答割合（%） ＊2018 年度調査までは、A「とても満足」、B「満足」と回答した比率	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
就職率	就職率 「キャリアセンター統計資料」	就職者数（自営含まず）／就職希望者数	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
大学院進学率	大学院進学率 「キャリアセンター統計資料」	大学院進学者数/学部卒業者数	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

（※）「知識・技能・能力の獲得状況」の「知識・技能・能力」とは、一般的な教養、論理的思考力、専門分野や学科の知識、グローバルな問題の理解、多様性を尊重する力、主体的に行動する力、リーダーシップ力、人間関係を構築する力、対立する価値を調整する力、地域社会が直面する問題を理解する能力、国民が直面する問題を理解する能力、困難を乗り越える粘り強さ、文章表現の能力、外国語の運用能力、生涯にわたって学び続ける能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、数理的な能力、コンピュータの操作能力、誠実さと品位、時間を効果的に利用する能力、卒業後に就職するための準備の程度、を指す。

（2）学部独自KPI

KPI	定義	基準	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
神学部国際プログラム参加者数	神学部プログラムである「Mission in Dialogue A・B」及び「Theology in Dialogue」の参加者数及び本学神学部生の割合	本学学生数／参加者数 （参加者数の目標値：10 名） （本学部生割合の目標値：30%）	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
ディアコニア・プログラム修了者数	ディアコニア・プログラム（神学部独自プログラム）の卒業者に対する割合。	（毎年度の）プログラム修了者数 ／（毎年度の）卒業者数 （目標値：卒業者数を 30 名として修了者数 3 名、すなわち 10%）	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

（3）学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
入試難易度 （偏差値）	ベネッセの進研模試のデータにおける合格可能性 60%以上となる偏差値 高大接続センター		非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
同系列学部勝敗	ベネッセの進研模試のデータにおける同系列学部合格者の競合大学（同志社、立命館、関西）との入学比率 総合企画部	本学と相手校の両方に合格していずれかに入学した受験生のうち、本学に入学した者の比率 本学入学者数／（本学入学者数＋併願校入学者）（%）	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
外国人留学者数	外国人留学生 CIEC 年次報告書	詳細は SGU の定義に準拠	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
ダブルチャレンジ派遣者数	当該年度の卒業生のうち、ダブルチャレンジ制度のアウェイチャレンジの単位を取得して卒業した学生数 グローバル化推進本部	①インターナショナルプログラム②ハンズオン・ラーニング・プログラム③副専攻プログラムのいずれかで単位取得し卒業した学生数 ※学部毎は延べ人数	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度 （「満足」～「不満」の5段階評価） 卒業時調査	5 段階評価のうち「満足」と回答した比率（%）	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
スクールモットーの浸透度	スクールモットー“Mastery for Service”を普段意識する程度は （「常に行動の規範としている」～「全く意識しない」の 5 段階評価） IR 卒業生調査	5段階評価のうち、 A「常に行動の規範としている」または B「ときどき意識している」 と回答した割合（%） ＊2018 年度調査までは A「常に行動の規範としている」または B「頻繁に意識している」と回答した比率	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Well-being 度	現在の自分を取り巻く環境（特定 7 項目）に対して、あなたはどのように思いますか。 （「そう思う」～「そう思わない」の 4 段階評価） IR 卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目対して A「そう思う」、 B「どちらかといえばそう思う」 と回答した割合の平均値	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

神学部実施計画・全体評価
2021 年度にカリキュラム改編や神学基礎テストの進級試験としての導入を実施し、試験に向けて復習をする学生の様子も見られたことより、今後の各KPIの変化に期待したい。 また、大学院の進学率が芳しくない状況にあったものが改善した。就職率においては高水準を確保できている。進路支援プログラム（初年次に大学生活の全般的な事柄のみならずキャリア設計においても意識づけることでその取り組みを促進するプログラム）などの学部独自のキャリア教育・支援の機会提供が結果となっていると推察する。従来の形式に捉われず、継続的に行っていくとともに、進路情報の把握にも努めたい。 近年、留学プログラムへの参加者割合が伸びてきている。神学部でのカリキュラムを学びつつ様々な文化に触れることで、より広い知見を具えた伝道者を養成することが可能になる。さらに、Kwansei コンピテンシーの獲得、卒業後の進路においても様々なフィールドで活躍する基礎となる。2021 年度に引き続き、2022 年度にも Virtual Exchange で実施することができた。この経験を基に、COVID-19 が収束した後も Virtual Exchange の利点をよく理解し、プログラム毎に適切な開講形態を判断したい。

【神学研究科】中期計画総括シート

提出日: 2023 年 1 月 24日

責任者	神学研究科 委員長	担当部局	神学研究科

1　神学研究科の理念、目的、各種方針

神学研究科の理念	変更の有無
神学研究科は、「キリスト教の伝道に従事すべく選ばれた者を鍛錬する」（関西学院創立時制定の「憲法」第二款「目的」）ことを基に、高度な神学研究ならびに神学教育を行い、神学の普及に努める。	有・無
神学研究科の目的	**変更の有無**
神学研究科は、関西学院創立時の基本理念を継承し、神学における専門研究者の育成とキリスト教会やキリスト教主義学校教育、社会福祉や社会活動などの領域において指導的な役割を果たすことができる、高度な専門的知識を具えた職業人を育成することを目的とする。併せて、幅広くキリスト教に関する知見を具え、多元化社会において深い見識の下、具体的な社会や世界の問題を発見し、これと取り組み、解決できる人材を育成することをも目的とする。	有・無
学位授与方針（DP）	**変更の有無**
【博士課程前期課程】 博士課程前期課程の教育目標を下記の通り定め、本課程に2年（4学期）以上在学して所定の単位を修得し、かつ研究指導を受けた上、修士論文を提出して、その審査および所定の試験に合格した者に修士の学位を授与する。 1. 神学において専門的な知識を修得し、思索を深めている 2. 各自の専門領域において、優れた特色ある研究を行う能力を有している 3. キリスト教の本質にふれつつ、幅広くキリスト教に関する知見を養い、多元化社会において深い見識をそなえ、具体的な社会や世界の問題を発見し、これとキリスト教的な立場から取り組み、解決できる力量を身につけている 4. キリスト教伝道者コースにおいては、礼拝の指導者、説教者、牧会者として宣教の現場で直ちに活躍しうる力量を身につけている。 5. 修士論文を執筆できる能力を有している **【博士課程後期課程】** 博士課程後期課程の教育目標を下記の通り定め、本課程に3年（6学期）以上在学して所定の研究指導を受けた上、キャンディデート・ステータス取得後に博士論文を提出して、その審査および所定の試験に合格した者に博士（課程博士）の学位を授与する。 1. 神学の様々な分野における専門的学識を有している 2. 神学の専門家として社会と教会とに貢献できる能力を有している 3. 博士論文を執筆できる能力を有している なお、学位申請論文の審査は、専門分野での最新の知見を摂取したうえで独創的な視点で、高度な分析手法と優れた考察力などによって論文が作成され、国内外の学界や社会へ著しく知的貢献が大きいものとなっているかどうか等を基準に学位授与の可否の判定がなされる。	有・無
教育課程の編成・実施方針（CP）	**変更の有無**
神学研究科では、神学を専攻領域とし、その中に、4 つの研究分野（聖書分野、歴史・文化分野、組織分野、実践分野）を設けている。学生各自が研究主題を選び、指導教員との学問的、人格的な触れ合いによって、それを深め、学位（修士、博士）を取得できるよう、研究と教育を行っている。 **【博士課程前期課程】** 神学の専門的知識の獲得を目指し、4つの研究分野の領域において以下の教育を行うためそれぞれの科目を配置する。 1. それぞれの研究分野における専門的知識等の修得を目指し「特殊講義」を配置する 2. 聖書を原典で読む能力の涵養のために「原典講読」を配置する 3. 神学の専門的知識に加えて言語力の向上を目指して「外国語専門書講読」を配置する 4. 教会をはじめとした現場での実習を伴う科目を配置する 5. 伝道者コースにおいては、宣教に携わる能力の涵養のため、牧会、説教、礼拝、教会経営について「演習科目」を配置する 6. 研究能力の涵養と、修士論文の執筆の指導のため「研究演習」を配置する **【博士課程後期課程】** 1. 博士論文の執筆の指導のため、「研究演習」を配置する 2. 専門的学識を深めるため4つの研究分野において「特殊研究」を配置する	有・無

学生の受け入れ方針（AP）	変更の有無
博士課程前期課程 キリスト教伝道者コースにおいては、所属教会からの推薦を得られ、かつ幅広い神学的知識と思索力を有し、多様な宣教の現場で活動する高い志を持つ者。キリスト教思想・文化コースにおいては、受洗の有無を問わず、幅広い神学的知識と思索力を有し、キリスト教が人類の歴史の中で生み出してきた思想や文化的財などの学際的領域に興味を持つ者 **博士課程後期課程** キリスト教神学に関連する研究に対して授与された修士学位に相応しい知識（語学能力を含む）と研究能力を備えており、神学の様々な分野における専門的な学識知識と思索を深め、優れた特色ある研究を行うことができる者	有・(無)

学生支援に関する方針	変更の有無
少人数教育の利点を生かし、学生各自のニーズをきめ細かく抽出し、能力や特性に応じた支援を以下の通り行う。 1）研究演習単位で個別ケースごとに必要な支援を検討する。 2）必要に応じて学内関連機関（総合支援センター・保健館など）との連携において情報共有し、本人との面談を実施、場合によっては保証人への連絡および面談の実施、本人との面談実施などを通じて支援を行う 3）当該学生のプライバシーの保護を尊重したうえで、学部長室委員会や研究科委員会において学生の動向報告として情報を共有し、支援の内容をはじめ、広く学生への対応に関しても意見交換を行う。 4）全学で定める方針がある場合にはそれに従い、上記に則って学生への支援を模索する。 修学支援 学籍異動を希望する院生については教員（指導教員、場合によっては研究科副委員長）、事務担当者が面談を行う。 学費援助などの経済的支援、研究補助などを目的とした奨学金を神学研究科独自で実施する。留年者の状況把握については、学部長室委員会ならびに研究科委員会でも情報共有がなされ、対応について懇談を行い、当該院生への指導については原則、指導教員が行う。 障がい学生に対する支援 全学で定める方針に従い、個別ケースに応じた対応・支援を模索する。 生活支援 希望する院生に対し、教員（指導教員、場合によっては研究科副委員長）、場合によっては事務担当者も含めて面談を行う。必要に応じて学内の自立支援コーディネーター、学生カウンセラー、医師・看護師とも連携の上、学修を継続する方法を模索する。 各種ハラスメント 全学で定める方針に従い、授業内またはガイダンスなどにおいて周知・指導を行いつつ、個別ケースに応じた対応を模索する。 進路支援 インターンシップ 「臨床牧会実習」（夏期集中の正課科目）は、医療機関（病院）での実習科目である。患者、その家族との係わりを通じて牧会者としての自己理解を深め、その役割を明確にするとともに、そのニーズがどこにあるのかに気づき、牧会方法について思索していくことを目的に実施している。 「キリスト教社会実習」（各学期開講の正課科目）は、社会の様々な問題（滞日外国人、セクシャリティ、HIV等）にキリスト教的視点から考察を行い、さらにキリスト教団体やキリスト教福祉事業においてこれらの課題に直接携わっているクリスチャンワーカーの働きに参加し、理論と実践の両面から現実の社会問題を捉え直す機会を与えることで、将来の牧会のあり方を考える機会を提供することを目的としている。また正課ではないが、夏期派遣のプログラムも実施する。これは、全国各地の協力教会（日本基督教団）での奉仕を通じて現場を体験することを目的としている。	(有)・無

教員像	変更の有無
1. 競争力の高い優れた神学研究者であること 2. 高い人権意識を有していること 3. 福音主義の教職者である事が望ましい	有・(無)

教員組織の編制方針	変更の有無
神学研究科教員組織編制方針 1. 神学研究科の専任教員は、神学関係の分野において博士学位を有し、また継続的かつ発展的に研究を行う者とする。 2. 伝道者養成という学部設立のミッションを達成するため、教員は福音主義の教職者を中心とする。しかし、神学研究の専門性の観点から、分野・業績・教歴などを勘案して、信徒の教員を採用することを妨げない。 3. 神学教育について豊かな経験を有する者とする。 4. 聖書学（旧約・新約）、歴史神学・キリスト教文化、組織神学、実践神学の各分野に、適切な人員を配置する。	有・(無)

2. 実施計画

（1）必須型

実施計画（タイトル）	1-（1）-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進（3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備）	帳票の有無	不要
内容	本学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」（「Kwansei コンピテンシー」）を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」である DP（ディプロマポリシー）を策定する。この DP は、すべての学生が卒業／修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は（a）DP の再確認（b）DP と CP（カリキュラムポリシー）の整合（c）シラバスの実質化（d）シラバスに沿った成績評価（e）DP と AP（アドミッションポリシー）の連動、を厳格に運用する。 本学はこうした学部／研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。		
学部独自の取り組み内容	本研究科ではDP・CP・APそれぞれの内容を明確にした上で『履修の手引』とウェブを通して公開し、研究科に関わる教職員・学生、そして全学及び学外へ公表している。さらに新入生には履修指導を学年全体で実施するとともに、新入生を含めた在学生全員には、各ゼミナールの担当教員が個別面談を通して研究計画を評価し、それに伴った履修のスケジュールを確認している。なお、学生は論文提出年度を除き、年度ごとに研究計画を所定用紙にて研究科へ提出することになっている。		

＜指標 1＞	大学院における授業調査回答率及び 全回答における質問項目「カリキュラム構成は、学習効果のあがる、満足のいくものでしたか？」に対する肯定的回答（大変満足、やや満足）の割合［年度平均］			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	回答率 60%以上 肯定的回答 45%以上	回答率 60%以上 肯定的回答 45%以上	回答率 60%以上 肯定的回答 55%以上	回答率 60%以上 肯定的回答 55%以上
実績	回答率 32.2% 肯定的回答 50.0%	回答率 20% 肯定的回答 100% ＊秋学期科目は集計中のため春学期実績		
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）	（2023 年度を目処に決定）
実績				

	指摘事項	研究指導計画について、神学研究科博士課程前期課程、同後期課程では、研究指導の方法を定めていないため、これを定めあらかじめ学生に明示するよう、是正されたい。
	改善計画	（何を、どのように改善するか） 博士課程前期課程及び後期課程それぞれの課程において、「履修心得」に示される手続き（履修登録、「研究計画書」や「題目届」等の書類提出）に則り、研究指導計画を記す。具体的には、入学時の指導教員（場合により副指導教員も含む）の選択から、前期課程においては中間発表を経て口頭試問まで、後期課程においてはキャンディデート・ステータスの取得を経て口頭試問までの道程について、いつ、どのような視点をもって研究指導を行うのかを明文化し、「論文審査基準」「副指導教員制度」などの枠組みとともに説明の上、「履修心得」に掲載する。

＜指標 4＞	＜認証評価対応＞研究指導計画の改善			
ロードマップ	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標		「研究指導の方法」を明文化し、「履修心得」に掲載する。	－	
実績		（上記、達成）『2021 年度履修の手引』pp.28 -30	2021 年度に達成済み。	

【2021 年度の進捗状況・今後の取り組み】

本研究科では、そのDP・CP・APに則って学位取得に至るプロセスを策定・検証している。例えば博士課程前期課程においては、学位に相応しい「修士力」を担保するために、より意識的なカリキュラム策定に向けて、カリキュラム研究委員会及び研究科委員会で懇談を重ねている。その際に、研究科の定員確保と修士力担保とのバランスをいかに保証するかという問題を一つの重要な焦点と定めて、これに関する教員の問題意識を高めるとともに、継続的に懇談している。なお、入学から学位取得までの道程を、学生が念頭に置きながら論文執筆に臨む環境を整えるべく、本研究科の「研究指導計画」「研究指導の方法」を文章として整備し、2021 年度の「履修心得」に掲載した。なお明文化の際には、「論文審査基準」「副指導教員制度」などの制度的な枠組みについて、理解を促進することも狙っている。今後も引き続き、再検討と必要に応じた見直しを図っていく予定である。

また大学の方針に沿ったシラバスの第三者チェックを実施し、主として授業目的、到達目標、成績評価に関する6項目について確認している。その取組を通じて3ポリシーを意識した講義内容及び構成を促している。

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

研究科においては、「研究指導の方法」について履修心得などにより学生へ明示した。周知に十分なものとして機能するか、今後も引き続きの検証を行う。

実施計画（タイトル）	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用	帳票の有無	不要
内容	非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム（成果）を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」（超長期ビジョン・長期戦略）および中期総合経営計画（実施計画・基盤計画）の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自に KPI を設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取り組みに活用する。		
学部独自の取り組み内容			

＜指標 1＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標				
目標				
実績				

※本帳票の末尾において、学修成果を測定する研究科独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度研究科における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。

＜指標 2＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標				
実績				

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

実施計画（タイトル）	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用	帳票の有無	要
内容	本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画（SGU 含む）であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。 両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。 このため、本学では、2019 年度から各学部／研究科、各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。		
学部独自の取り組み内容			

＜指標 1＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標				
目標				
実績				

※研究科における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。

＜指標 2＞				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標				
実績				
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標				
実績				

【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】

3. 神学研究科のKPI

(1)学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
学位授与数 (M・D・P)	修士、博士、修士(専門職)の学位授与数(※乙号除く) 「大学基礎データ」	授与する学位数が多いほど○ (人)	M 非公開	M 非公開	M 非公開	M 非公開	M 非公開
			D 非公開	D 非公開	D 非公開	D 非公開	D 非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			M 非公開	M 非公開	M 非公開	M 非公開	M 非公開
			D 非公開	D 非公開	D 非公開	D 非公開	D 非公開
就職・進路決定率 (M)	就職・進路決定率 「キャリアセンター統計資料」	(就職+自営+就労継続)/(修了者一進学者)	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
博士後期課程への進学者数 (M)	進学者数 「キャリアセンター統計資料」		現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
日本学術振興会 特別研究員数(新規) (D)	特別研究員のうち、当該年度の新規採用者 「研究推進社会連携機構資料」		現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
研究者輩出数(D) (将来)			現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

(2)研究科独自KPI

KPI	定義	基準	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
伝道者輩出者数	年度における伝道者(教会教職者)輩出-数。なお、修了後、複数年間にわたる資格取得準備などの期間を考慮し、既修了生も含めた人数とする	伝道者輩出数=(毎年度) 3 名以上。	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
学会発表者数	年度における学会(学内の研究会を含む)発表者数。	学会(学内の研究会を含む)発表者数=(毎年度)延べ 3 名以上。	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

(3)学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度 (「満足」~「不満」の5段階評価) 卒業時調査	5 段階評価のうち「満足」と回答した比率(%)					非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Well-being 度	現在の自分を取り巻く環境(特定 7 項目)に対して、あなたはどのように思いますか。 (「そう思う」~「そう思わない」の 4 段階評価) IR 卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目対して A「そう思う」、 B「どちらかといえばそう思う」 と回答した割合の平均値	現在値(2018 年度)	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度
							非公開
			2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

神学研究科実施計画・全体評価
神学研究科においては、博士学位取得に至るまでのプロセスを明確にするなど学生の学修支援体制を整備してきた。伝道者の輩出も、年度によって差があるものの、過去 60 年にわたって平均して 6 名程度の伝道者をコンスタントに輩出している。特に課題として認識しなければならないのは、学部から研究科への進学者数、また前期課程から後期課程への進学者数である。まず、2022 年度入試(2021 年度実施)を除いてここ数年の前期課程への進学者数は定員(10 名)を満たしていない。また、後期課程にもここ 3 年間入学者がいない。奨学金制度の充実、教学補佐やTAへの採用促進なども課題であるが、根本的には学部における学修の質の向上、さらには大学院進学に向けてのモチベーションの向上が挙げられる。学部と研究科との連携、また教員と学生、さらには学生間のアカデミックな交流の活性化が必要であると考える。